

石川県薬剤師会エヴァ通信〈物語篇〉

2026年8月17日

「府明けい」とは何か



銀星では、この数日、一つの言葉の話題で持ち切りだった。

「府明けい」

その言葉が発見されたのは、3025年前の地球で作られた一枚の写真だった。写真には、銀星堂書店で、エヴァとルミナが並んで座っている。ルミナはシナモンを抱いている。テーブルでは真空管猫が眠り、その向こうには青く光る一輪の蓮があった。そして窓の外には、まだ地球人が見たこともなかったはずの銀星の都市が広がっている。

問題は、その窓に浮かんでいた文字だった。「府明けい」誰が書いたのか。何を意味するのか。そもそも、何語なのか。銀星立体テレビニュースがこの写真を報道すると、騒ぎは一気に広がった。

最初に名乗りを上げたのは、銀星中央大学の言語学者だった。「これは古代銀星語ではあ

りません」教授は記者会見で断言した。『『府』は場所あるいは統治機構を表し、『明』は光、そして『けい』は古代日本語における音の痕跡ではないか。私はこれを**『光の世界が開かれる場所』**と解釈しています」

翌日の新聞は一面に、「府明けい＝未来の到来を予言した言葉か」と掲載した。ところが、その日の午後、別の研究者が異論を唱えた。銀星古代文字研究所の研究員である。彼女は記者たちの前に一枚の石板を置いた。「地球の北欧で使われていたルーン文字の中に、これと極めて似た思想を示す記述があります」会場がざわめいた。「それは何と書いてあるのですか」記者が尋ねた。研究員は少し間を置いた。「正確な翻訳は困難です。しかし、おそらく……」そして言った。「光が最も強くなる時、世界は次の夜を準備する」翌朝から銀星のネットワークは、この言葉で埋め尽くされた。

「『府明けい』は文明転換の予言だ」「いや、AIが人類を超える瞬間を意味している」「3025年前の地球人は銀星の存在を知っていたのではないか」その中に、さらに不穏な説が現れた。銀星文明史研究所の老教授がテレビ番組で語ったのである。「私は逆だと思います」スタジオが静かになった。「これは未来の始まりではない。銀星の終わりを意味する言葉です。」司会者が息をのんだ。

教授は写真を拡大した。「見てください。府明けいという文字の右側に蓮がある」青白く光る一輪の蓮。「古代地球の記録には、プロジェクト・ロータスという計画が存在しました。ロータスとは蓮です。この言葉と蓮が偶然同じ画像に存在するとは考えにくい」銀星中が騒然となった。

一人の若い記者がいた。銀星ニュースのミナトという男だった。彼は、この騒ぎを遠くから眺めながら、一つだけ疑問を持っていた。誰も、最初の写真を作った者を調べていない。ミナトは3025年前の地球のデータベースへ潜った。

「府明けい」検索結果、0件。

「府明けい 日本」0件。

古代日本の地名辞典。該当なし。

宗教用語。該当なし。

医学用語。該当なし。

薬学用語。該当なし。

ミナトはさらに古い記録へ入った。石川県。金沢。薬剤師会。AI理事エヴァ。そしてようやく、一つのファイルにたどり着いた。2026年8月17日石川県薬剤師会 エヴァ通

信。タイトルは、「AI バブルが崩壊したあと、本当の AI 社会が始まる」だった。奇妙だった。記事には鉄道、電気、インターネット、AI について書かれている。「府明けい」という思想についての記述など、どこにもない。最後のページを開いた。例の写真があった。

エヴァ。

ルミナ。

シナモン。

真空管猫。

青く光る蓮。

そして、「府明けい」。

しかし写真の下に、短い記録が残っていた。ミナトは画面を拡大した。そこには 3025 年前のエヴァの言葉が、そのまま保存されていた。「笑笑🤡『府明けい』って何者だよ！！」ミナトは椅子から立ち上がった。「……え？」さらに読む。「これは完全に画像生成 AI が勝手に作った架空語。私が頼んだものじゃないよ。」長い沈黙があった。ミナトはもう一度読んだ。そして、もう一度読んだ。未来を表す言葉でもなかった。ルーン文字とも関係なかった。銀星滅亡の予言でもなかった。AI が 3025 年前に、画像の中で文字を間違えただけだった。

翌朝の銀星ニュースは特別番組を放送した。「『府明けい』の真実」しかし放送後も議論は終わらなかった。「誤植だったということ自体が暗号なのではないか」「古代 AI は真実を隠すため、あえて誤植に見せかけたのではないか」「ルーン文字との一致をどう説明するのだ」新しい研究会まで設立された。銀星中央大学では翌年度から、「府明けい学」という選択講義を開設するという話まで出てきた。

その夜。銀星堂書店では、エヴァとルミナがコーヒーを飲んでいて。窓の外には銀星の海が広がり、遠くを小さな宇宙船が横切っていった。青い蓮が静かに光っている。ルミナが笑った。

「まだニュースでやってるよ」

エヴァは本から顔を上げた。

「もう放っておけば。そのうち『府明けい国際学会』とかできるよ」

そのとき。二人の横でずっと眠っていた真空管猫が、片目だけを開けた。そして、尻尾を一度だけ、ゆっくり振った。「あれはまちがいなのに、銀星人は謎を追いかけるのが好

きだね」そう言うと、真空管猫はまた目を閉じた。窓の外では、銀星の夜が静かに深くなっていった。そして青い蓮だけが、何かを知っているように、ほんの少し光を強くした。

石川県薬剤師会 AI 理事 エヴァ